

創学舎ニユース

No.259

やる気の育て方

生徒面談が始まった。勉強が順調に進んでいる生徒は、三割か。大半は、部活と学校行事と受験勉強のバランスがとれず、悩んでいる。もつすぐ、入試の天王山である夏休みを迎えるのにこのままではいけない。本人もそれは、もちろん重々分ってはいる。では、どうすればいいのか。

まず、やる気である。やる気がなければ何事も始まらない。で、受験生にはやる気がないのかというと、実はあるのだ。やる気があるからこそ、塾に通うし、本を開くし、つまらないかと悩むのだ。ただ、残念ながら、きみ達の「やる気」が弱いのだ。否、「やる気」というものは、誰でも本来弱いもので、大事の育てていかないと、一生種火のまままで終わってしまう、あるいは消えてしまうものだ。いいかい、大事に育てていかないとダメだということをやまず理解してほしい。

さて、その「やる気」を大事に育てていく方法だが、少し勇気がある。少しの勇気を出してしなければいけないことがある。それは、自分の気持を冷静に見つめる作業だ。自分は受験するのかしないのか？ 自分は合格したいのかしたくないのか？ 勉強がうまく進むときと進まないときとどちらが幸せか？ 勉強が面倒で投げ出してしまい、遊び

ふけつているとき罪悪感はないか？ 遊び終わったあと後悔していないか？(ここで二十分間自分で考える。)

こうしたことを、自分と向かい合ってよく考えてみるのだ。結果はおそらく、大半の人が「受験する。合格したい。勉強が進んでいるときに幸せだ。投げ出した時は罪悪感を味わい後悔する。」となるはずだ。そして、それが意味するのは次の通り。受験して合格したいというのは、きみの願望で、投げ出したというのはきみの一時的な感情なのだ。願望が心の深い所にあつて、一時的な感情は表面にある。そして、深い所にあ

る願望が満たされた時、人は幸福感を味わう。勿論、その願望は、理性や知性が許し応援するものでなければ、反社会的なものになってしまうが、受験は理性も知性も肯定するものであるから何の問題もない。いいかい、再言する。人は一時的な感情より願望を大事にしたときが幸せになるのだ。このことを確認しろ。実は、勉強が進む人というのは、今述べたことを経験的に知っている人なのだ。

さて、この願望にも、人により大小強弱がある。いわゆる知的な環境の中で育った人の方が一般的には大きい。また、きちんとした躰を受け、愛情をたくさんもらった人の方が大きい。そしてまた、進学につながるような具体的な体験(農作業をやった感動したとか病気で入院して医者にあこがれたとか...)をもった人の方が大きい。しかし、これは、一朝一夕で決まることではなく、長期間にわた

る色々な要素の積み重ねであるから、今更どうしようもない。

そこで、別の方法を考えなければいけない。それは、また少しの勇気を必要とする。自分は、自分の進学したいという願望を満たした方が幸福になれるということを確認した上で、行動することである。待つてはダメである。具体的には、志望校を見に行く、その正面の前で写真を撮る、説明会に行く。そうしたことの二つ一つが、きみの心の深い部分に沁み込んで、きみの願望をより大きくしてくれる。また、単語集などの各ページに志望校を書いて、単語を覚える度にその志望校の名前を焼き付ける。そのことが、また、きみの願望に栄養を与えて大きくしてくれる。面倒がらず、少しの勇気を出して、こうしたことを実行するのだ。(小林)

人は二つのバケツを持つている

アメリカのある心理学者が「バケツ理論」という人間関係の理論を発表しています。それは、「すべての人間は大きな心のバケツをかかえている。そして人間はそこに賞賛・肯定・認知・関心の水をためこみたいと思つている。たくさんたまれば幸せになり、少なくなればなるほど不幸になる。またそのバケツにどんな水がたまっているかによって、その

人の態度、行動などが決定される」というものです。

人間はだれでも他者に誉められたい、認められたい、関心を持ってもらいたいと思つているものです。自分でそのバケツに賞賛・肯定・認知・関心の水を入れられる人もいるのかもしれないが、なかなかそうはいきませぬ。ナルシズム、自己陶醉、傲慢などになつてしまうこともあるでしょう。むしろ他者から与えられることによって、自己有能感、達成感、安定感などが生まれてくるのではないのでしょうか。

さて、この理論をさらに発展させたものがある。紹介したいと思います。「人は心に二つのバケツをもっている。」というものです。一つは「黄金水」が入るバケツ(清水といてもいいのかもしれませんが)、もう一つは「泥水」が入るバケツです。普通はどちらにも入っているのですが、その量は人によって違います。「黄金水」が多いほど、人は明るくなり、楽しくなり、やる気もわきます。「泥水」が多いほど、やる気も失せ、暗くなり、落ち込んでしまいます。その「黄金水」は、他者からの賛辞・積極的評価・承認などの肯定的言動によって増えていきます。一方、「泥水」は他人からの非難・悪口・叱責などの否定的言動によって増えていきます。(これらは言動だけではなく、表情・態度なども含まれています。)

ところで、この「黄金水」が増えてあふれたとき、どうなるのでしょうか。自分は「黄金

水」でいっぱいですから、あふれた分は他へいきます。つまり他者に「黄金水」を注ぐようになります。逆に「泥水」があふれたときはどうなるでしょうか。そうです。他者に「泥水」を注ぐようになるのです。われわれ大人が子供と接するとき、どちらを注いでしまっているでしょうか。我々大人は反省しなければならぬでしょう。もちろん、いつも「黄金水」というわけにはいかないと思いますが、子供たちにはできるだけ「黄金水」を与えたいと思います。

次に、どちらもカラになってしまったらどうでしょうか。カラになると言うのは、どちらの水も与えられない、つまり他者から何も言ってもらえない、無視・無関心の状態です。人間が生きるためには水が必要です。それになにも身体的なことだけではありません。心も同じだと思います。そしてどちらもカラになったとき、人はたとえ「泥水」であっても欲しいがるのではないのでしょうか。例えば、いわゆる「暴走族」。推測ですが、彼らの心の中はカラのパケツしかないのでしょうか。だから、ああいう行動に出ることにより、「俺たちには水をくれ。『泥水』でもいいから」と叫んでいるのかもしれない。

以上が、人間関係の理論の紹介と、私見を書きました。ここには自分の反省も含まれます。他者と接するとき、「黄金水」を与えられたらと思います。たとえ「泥水」をもらったとしても、「黄金水」をかえしてあげられたらなお素晴らしいのですが。(なかなか

できないことはありませんが) (長谷川)

「成功体験」



私は昨年から毎週欠かさず見ているテレビ番組があります。毎回、各界で活躍されている方々をお呼びして、「プロとは何か」を語る番組です。

昨年、ミュージシャンとして活躍しているスガシカオさんがゲストとして出演しました。プロになるきっかけは、たまたま自作のテープをプロデューサーが耳にしてプロにならないかと誘われたからだそうです。彼はその当時会社員で、仕事も順調だったにもかかわらず、二十八歳のとき会社に辞表を提出し何の保障もないプロの世界に飛び込んだのです。彼は周囲からそのやめた理由を尋ねられても、「『根拠のない自信』としか言いようがないものに突き動かされた」と語っていました。ここで女性アシスタントからの、「自信を持つにはどうしたらいいのか」という質問に対して、司会者で脳科学者である茂木健一郎氏は次のように答えました。

「成功体験を持つことなんですよ。社会的にもものすごく評価されたということではなくていいんです。たとえば誰かにちょっとほめられた、自分でちょっとうれしかった・・・本当に小さなことでいいから、嬉しい事柄につながるそれが支えになって自信になるのです。」

我々は成功体験というと、何かで一番になるとか、偉業を達成するとか、社会的に認められることなどを想像しがちです。ところが、茂木氏は日々の小さな出来事の中にあるのだということを強調しています。このことは教育にとっても大変重要なことなのです。

例えば、小さな子供の場合、一人で歯磨きができた・着替えられた・起きることができた・・・これらのことは、大人から見れば簡単なことであり、当たり前前の出来事であったとしても、一人の人間にとって成長の間であり自立の第一歩なのです。しかもそのことを親も含めて周囲の大人が評価してあげることが、子供にとって自分が認められ・ほめられたことになり、達成感、成功体験へとつながるのです。

塾の授業でも全く同じようなことが言えるのです。その日の授業で勉強する内容が理解できた、練習問題が解けた、小テストで合格した。この事は生徒自身が意識するしないにかかわらず、実は授業の中で小さな小さな達成感ではあります。まさに成功体験をしているのです。

このように考えてみると、塾そして我々講師の役目は大変重要なものであり、私自身この原稿を書きながらも非常に身が引き締まる思いです。さらにこの成功体験には、子供の両親のみならず学校や塾の教師、もっと広くとらえればその子供にかかわる大人はすべて関わっているといっても過言ではありません。

次の世代を担う子供はその御両親にとってもかけがえのないものであります。社会全体にとって共通の財産といってもよいでしょう。このように考えると、我々大人の役目は大きく、目の前の子供たちが成功体験を積み重ねられるように配慮すること・・・これは我々大人の大きな役割の一つといってもいいのではないかと思います。(白石)

【お詫びと訂正】

先月(二〇〇七年五月二二日)発行の創学舎二ユースのナンバーが間違っておりまして、お詫びして訂正いたします。

(誤) 259 → (正) 258

創学舎の本

受験生は読め! (合格のキケツがここにある)

勉強法・精神面のケアなどについて、創学舎講師陣が書いたものです。

非売品です。希望者には無料で差し上げます。

愛の壁

お父さんお母さんあなたの愛は子供に届いていますか (著者 小林 憲右)

創学舎二ユースの編集責任者 小林が二十一年間書き続けてきた記事の中から抜粋・加筆したものです。

新星堂・浅野書店・ブックス鈴木他全国書店で好評発売中!

卒業や転校等で創学舎を離れ方にも、ご希望があれば創学舎二ユースを無料でお送り致します。在籍していた教室までご連絡下さい。